

第11回 国際地学オリンピックフランス大会

11th International Earth Science Olympiads



【参加国・地域】
 [アジア]イスラエル、インド、インドネシア、韓国、中国、日本、台湾、カザフスタン、カンボジア、スリランカ、タイ、フィリピン、バングラディッシュ
 [オセアニア]オーストラリア
 [北中南米]アメリカ、ハイチ、ブラジル
 [欧州]イタリア、ウクライナ、オーストリア、スペイン、チェコ、ドイツ、ノルウェー、フランス、ペラルーシ、ポルトガル、リトアニア、ルーマニア、ロシア、イギリス
 [アフリカ]ナミビア

FRANCE
 ニース・ソフィア・アンティポリス大学
 Université Nice Sophia Antipolis

in France

出発に先立ち、日本選手団は8月20日に東京大学にて最後の調整となる直前研修を実施。昨年の日本大会では過去最高となる金メダル3枚を獲得しているため、選手4人には大きなプレッシャーがかかる。

日付	大会日数	主な活動
8月21日	1日目	ニース空港へ到着・選手団登録
22日	2日目	開会式・研究室訪問
23日	3日目	ヨーロッパアルプスにて地質巡検
24日	4日目	筆記試験
25日	5日目	実技試験・天文台見学
26日	6日目	国際協力野外調査 (ITFI)
27日	7日目	ITFI発表準備・ESP
28日	8日目	ITFI-ESP発表会、さよならパーティー
29日	9日目	表彰式・閉会式、さよならパーティー
30日	10日目	日本へ帰国

国際地学オリンピック (International Earth Science Olympiad; 以下IESOと省略) は地球惑星科学についての知識を競う大会です。国内本選・国際大会では試験を受けるだけでなく、最先端に挑む研究者と交流し、地学に関心のある中高生の仲間をつくる絶好の機会でもあります。このページでは、フランス南部・コート・ダジュールで行われた国際大会の様子を紹介したいと思います。皆さんの地球惑星科学への好奇心が少しでも高まることを期待しています。

1 大会初日は選手団の到着日。第11回大会となる今年は近隣ヨーロッパ諸国から多くの選手が集まり、過去最大の世界29か国・地域から選手108名とゲスト選手9名がフランス南部のコート・ダジュールに集まった。日本チームも15時間を超えるフライトの後に到着 (P-1)。今年の大会は、数々の大学、研究機関が集まるValbonne学術地域の一角にあるインターナショナルスクール、Centre International De Valbonneをメイン会場として開催された (P-2)。選手、引率のメンター・オブザーバー共に高校内の寮に宿泊したが、大会中は基本的に接触は許されない。



1 大会会場へ到着



2 宿泊先・試験会場のキャンパス

2 大会2日目の午前中はメイン会場近くのニース・ソフィア・アンティポリス大学にて開会式が行われ、ついに大会が幕を開けた。各国のチームが民族衣装などを着用して会場に勢ぞろい、日本チームも法被姿で式に臨んだ (P-3)。IESOでは数多くの学生ボランティアが世界各国から集まって運営に協力してくれており、チーム毎に案内係兼通訳として大会中のサポートをしてくれる。日本チーム担当のJill Wendtさんは、ドイツ人ながら日本語が抜群に上手であった (P-4-5)。開会式の後は、ヨーロッパ主導で行われているサンプルリターンミッション、ロゼッタで得られた彗星の塵についての講義 (P-7)。Valbonneにある地球科学研究所Geoazurで数々の観測機器も続けて見学し、盛りだくさんの一日となった。生徒が見学をしている間、引率のメンター・オブザーバーは早速生徒の解く問題の検討を始める。今年も会議は長びき、夜中まで問題の検討・翻訳が続いた。



3 日本選手団入場



4 日本チーム担当のボランティアと集合写真



7 彗星塵についての講義中

6 観望所と選手団

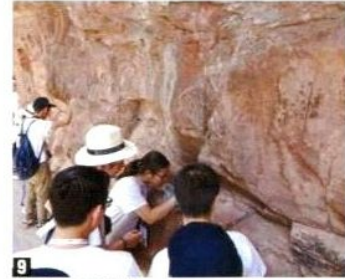
3 試験を翌日に控えて緊張している選手もいる中で、ヨーロッパアルプスの地質受験へ向かう。壮大な石灰岩の作る地形の中で、古生代・中生代のちょうど境目を示す地質を見て少し感動する (P-8-10)。実はこの日に回った地域が翌日の試験に出るとは、選手たちは思っていなかったようだ。選手がアルプスを回っている間、メンター・オブザーバーは屋内にこもって問題の検討・翻訳を続ける (P-11)。



8 アルプスの地質巡検

みんな真剣そのもの！
とてもいい経験になるね！

11 メンターの会議中



9 アルプスの地質巡検



10 アルプスの山麓にあるリゾート街

4 大会4日目からメダルをかけた試験が始まった。今年は古生物を除く全分野から幅広く出題されたのだが、例年比で試験の難易度も上がり、問題数も増えたので選手にとっては厳しいものだったかもしれない。(P-12。問題は日本地学オリンピック委員会上のホームページに公開されている。) 一日がかりの試験を終えてくれた中、翌日の実技試験に備えてゆっくり休む。

なかなか難しいですね…



12 筆記試験中

5 この日は外で行われる実技試験。地球科学の醍醐味は地層を観察したり、天体観測などを行うことであるが、その腕を試される日となる。今年は、露頭観察の他に、太陽から受けるエネルギーの推定 (P-13) や岩石の密度や含水量からその形成を紐解く問題が含まれていて、苦戦した選手も多そう。2日に渡る長い試験も終わる頃には、選手たちは国を超えて打ち解け始めていた。この日の夜は月までの距離を測定できるレーザーを兼ね備えた施設のコート・ダジュール天文台を見学し、選手も引率のメンターも興奮気味であった (P-14-15)。



13 気象の実技試験中



14 天文台見学



15 天文台見学

6 実技試験から一夜明けると、IESOのもう一つの目玉である国際協力野外調査 (International Team Field Investigation; 以下ITFIと省略) が実施された。前日までの個別の試験とは異なり、様々な国の生徒による混成チームで協力して野外調査を行う。IESOならではの「団体戦」である (P-16)。今年は①Causseolos地域 (古代人の生活と鍾乳洞の関係; P-17)、②Malpasset地域 (ダムが決壊と変成岩の片理の関係)、③Dramont岬 (石材として使用される火山岩)、そして④Cap d'Ail地域 (海岸段丘に形成された住宅とその問題点) の4つのテーマとコースに分かれて、班ごとに別々の調査を行った。英語で展開される議論をかきながら、日本選手たちは海外の生徒と意思疎通が出来ることを楽しんでいた。



16 異なる国・地域の選手で構成される国際混成チーム



17 鍾乳洞での調査風景